◎◎◎優秀賞

若き日の父から母へ

福島隆
東京都・六八・教員

今夜はお騒がせしました。おまけに下手なマンドリンのお相手迄無理にお願いしてさぞご迷惑だったことと存じます。何卒御許しを。

この間からお詫びしよう〳〵と思っておりながら何となく口では申し上げ憎く、と言って手紙では御存じのような有り様、つい〳〵延引しておりましたが、先日あなたが帝劇へ行かれたことをホンの気紛れからあんな失礼なことを申し上げ、そのためあなたが大変お苦しみになったとのこと、本当に申し訳ありません。あの晩は実際自分にも分からないくらいやるせない気持ちで到頭あんな我が儘なことを書いてしまって、後で大変後悔していたのです。ですから翌日片瀬からの帰途お宅へお寄りした時、未だ手紙が届かぬと伺って本当にホッとしたくらいなのです。もう今後は決してあんな失礼なことは申し上げることも愚心にも思いませんから、決して〳〵前途に不安なんてことは思わず何卒笑って下さい。

舎子様。毎日毎日遅く迄お邪魔してさぞおうるさいことと存じます。何だか自分でも恥ずかしいくらいなのですが、しかし今の私として本当にどうすることも出来ない、一日だって上らずにいられない、否一刻一瞬だってお側を離れたくない、願わくはあなたと私の身が一つに融け合ってしまってくれたらと、本当にもうあなたは私の生命の全部になってしまったのです。あなたさえよろしくば明日にも御一緒になりたいと思っているくらいなのです。

何卒あなたのお心持ちもはっきりお聞かせ下さいませんか。

夜も大分更けて参りました。何だか今夜は朝迄寝つかれそうにもない異常な興奮をさえ覚えております。「夜もすがら物思ふ頃はあけやらで」と詠んだ古人の心持ちが本当に味わえるようです。

私の将来に対する抱負、あなたとの生活に対する希望も今ここで申し上げたい心で一杯なのですが、何から書いてよいやら又如何言い現してよいやらさっぱり分かりません。これは又何れゆっくりとお互いに心置きなく語り合いたいと思います。では失礼します。さようなら。

＊平成六年六月死去した母（九三歳）の遺品から出てきたもので、若き日の亡父（昭和二七年没）から母への手紙です。大正一三年に書いたものらしいので、母は約七〇年間大切に保存していたことになります。